

萬葉集略解

十七上

柳田文庫

文庫11

A 104

25





48 10843

文
A 104
25



萬葉集卷第十七

天平二年庚午冬十一月太宰帥大伴卿被任大納言上
 京時從人等別取海路入京於是悲傷羈旅各陳所心作
 歌十首 上京之時陪後 ○同十年七月七日大伴宿禰家
 持獨仰天漢聊述懷歌一首 ○同十二年十一月九日大
 伴宿禰家持追和太宰時梅花新歌六首 ○同十三年二
 月右馬頭境部宿禰老麻呂讚三香原新都歌一首并短
 歌 ○同年四月二日大伴宿禰書持詠霍公鳥贈兄家持
 歌二首 か文後奈良
宅のうら 三日內舍人大伴宿禰家持從久邇
 京報送第書持歌三首 ○田口朝臣馬長思霍公鳥歌一
 首 ○山部宿禰赤人詠春鶯歌一首 却と邊と赤
と明と誤り ○同十六
 年四月五日大伴宿禰家持於平城故鄉作歌六首 乞ふ
本



48 10663

女女の字の字を ○同十八年正月白雪零左大臣橘卿率王卿等参入
 太上皇御在所十六首作歌五首 ○同七月越中守大伴
 宿祢家持赴任時大伴坂上郎女贈家持歌二首宿祢の字
と殺せり女大伴坂上郎女の字 ○更贈越中國歌二首 ○平羣氏女郎贈越
 中守大伴宿祢家持歌十二首 ○八月七日夜宴飲越中
 館下時守大伴宿禰家持歌一首女夜集于守大伴宿祢家持館宴歌
 祢池主作歌三首極と極と 守大伴宿祢家持歌二首
 掾大伴池主歌一首宿祢の字と異 守大伴家持歌一首
 大目秦忌寸八千島歌一首 ○大原高安真人作歌一首
かまの後 ○守大伴家持歌二首 ○史生土師宿祢道良歌一
 首 ○大目秦忌寸八千島館宴歌一首 ○九月二十五日
 大伴家持遥聞第喪感傷歌一首并短歌 ○十一月越中

守大伴家持大帳使掾大伴池主還到本任時相歡歌二
 首本文の傍に多く異あり ○同十九年二月二十日大伴家持卧病悲傷
 歌二首并短歌 ○守大伴家持贈掾大伴池主悲歌二首
 并序と本より二月二十九日三のサ一字あり、ちの此よりつらうとててあまのさしをちれハ別と ○姑洗二日掾大
 伴池主更贈歌一首并短歌三首姑と姑と混 ○三月三日
 大伴家持送掾大伴池主七言詩一首并序 四日大伴
 池主奉和守家持詩二首并短歌 五日掾大伴宿祢
 池主答守家持詩一首并序 ○同五日大伴家持短歌二
 首本文卧病作之と ○二十日大伴家持起戀情哥一首并短歌四
 首 ○四月大伴家持未聞霍公鳥歌二首本文の傍に多く異あり
大伴とちの傍に二月二十九日 ○大伴家持二上山賦一首と本より三月二十日
の字ハ右霍公をの左記され別と ○四月十六日大伴家持聞霍公鳥述懷歌一
と二上山のちの

首○大目秦忌寸餞大伴家持歌二首忌寸の下八十島○二十
ちのちのたは守大伴家持遊覽布勢水海賦一首并短歌二十
ちん八割きつ掾大伴池主敬和遊覽布勢水海賦一首并
日とてはたのちの絶○二十六日掾大伴池主餞守大伴家持時家持作歌
左にるれおきう一首介内藏忌寸繩麻呂餞守家持歌一首守大伴
家持和繩麻呂歌一首○大伴池主傳誦石川朝臣水通
橘歌一首○同日守大伴家持館飲宴歌一首○二十七
日大伴家持立山賦一首二十八日大伴池主敬和守
大伴家持立山賦一首并二絶○三十日守大伴家持贈
掾大伴池主歌一首并一絶本文の注五月五日掾大伴池
主報和守家持述懷歌一首并二絶本文の注と異なり○九月
二十六日守大伴家持思放逸鷹夢感悅一首并短歌下

万解十七上 目二

代舞のま○高市連黑人歌一首○同二十年大伴宿祢家持
と脱せり歌四首本文二月二十九日と○守大伴家持春出舉巡行諸郡當時所
屬歌九首本文ふよふよ属○大伴家持怨鶯晚哢歌一首○又
造酒歌一首

天
平
二
年
庚
午
冬
十
一
月
太
宰
帥
大
伴
卿
被
任
大
納
言
如
上
京
之
時
陪
後
人
等
別
取
海
路
入
京
於
是
悲
傷
羈
旅
各
陳
所
心
作
歌
十
首
元
房
本
陪
と
僅
と
他
人
の
子
ま
り
和
我
勢
兒
乎
安
我
松
原
欲
見
度
婆
安
麻
乎
等
女
登
母
多
麻
藻
可
流
美
由

万解十七上 目三

わのせこをあがまつがらよみつらせばあまをよめどなほもかきゆ
きうよよこいきねをゆいやせバといふ小同くいづともあれねが
たると吾待といひえんや

右一首三野連石守作

荒津乃海之保悲思保美知時波安禮登伊頭禮乃時加吾
孤悲射良牟
あらしのこをわひこみちよきあれたいづれのよまのわびるひやらん

和名抄筑前宗像郡小荒大荒といふ所なり、
五ノ、ミユ

伊蘇其登爾海夫乃釣船波底爾家利我船波底牟伊蘇乃
之良奈久

いふ所はあまのつらねをてふらうわねをてんいらのしらなく
磯多とてよほるる舟にあわね神をうらまへいづるよほんとしうれぬ

昨日許曾敷奈底婆勢之可伊佐奥取比治奇乃奈太平今
日見都流香母

きののころよあてはせのいふあとりひぢきのおだをくらうつるも
いふところ枕詞ひぢきのちまへ神中抄は榜磨ふる信説ふひぢきめち

たよりふれ李初王比天徳四年六月廿一日是日備前備中淡路ホ
飛驒至備前使申賊船二艘純友後御書奈多捨舟曉進疑入京欽

まゝ海氏お治むづらひぢきのちまへちまへふるふとぬ又たえかほま
うれぬのちまへまきしめよままごめぬをうまてるむぢきのちまへいま

のちまへあわねひぢきといひをほまひぢきと能れらうまわたりひぢ
きの灘ちまへと比治奇とまへまのほれるまわあんとびあまのそ

比治奇とあるをいひぢきをほのほとせんういふたれかこ
淡路島刀和多流船乃可治麻雨毛吾波和須禮受伊弊乎
之曾於毛布

あひぢきまどわらふはねのかぢまおもこれいふれどいへをいぢぢり
かぢまい楯取るん之唐本は此次は太船乃のちまへ海未通女のちま

麻波夜波のちま家尔底母のちま大海乃のちまついで大海乃のちまのた
ま右九首と習

多麻波夜須武庸能和多里雨天傳日能久禮由氣婆家乎

之曾於毛布

たまやもむこのわらふあまづよいのくれゆけいさぎぬのよ
むさやも、ちうふ柳河

家爾底母多由多敷命浪乃字倍爾思之乎禮婆於久香之
良受母

いふてしたゆふいのちなるこのふれわひいされがぢくのちうふも
一云字伎底之乎禮ハ

あまをくむらう字ちまき命あまを浪のよるれがひとまーられぬ
おくこの奥や又のそとくきこーとれびらこころかろう、え磨を
字伎底之いしありて、一云そのまろ

大海乃於久可母之良受由久和禮乎何時伎麻佐武等問
之兒等波母

おほうみのむらうもちうふいしこれをつままんととひこころも
海原の時のあられびこまこころのまはあまづこころおれ

姉とりの

大船乃字倍爾之居婆安麻久毛乃多度伎毛思良受歌乞
和我世

おちねのうまをれがあまづこのたどきとちうふがこころのせ
天せいの舟のちあまづよれよいらたぎったぎよ同、歌乞はま十二
歌方といつていさうとあれは、この方のほろこころかこ泡のこま
してあやふまこころいさう、わづせに同船の人をさそ

諸本如此可尋之 此七字は人のまの慮

海未通女伊射里多久火能於煩保之久都努乃松原於母
保由流可聞

あまをよめいざやうくひのおびりくつぬのまつばら。おとやゆるものも
後大のゆくとりよと雲をくつぬいそを三つぎしあよぬをぬいせつ名次山
つぬのね原つづのしめさんとよりみ、神名帳攝津武庫郡よ名次神社そ
て、和名抄よ同記津門のつとるこし

右九首作者不審姓名

十年七月七日之夜獨仰天漢聊述懷一首

多奈波多之船乘須良之麻蘇鏡吉欲伎月夜雨雲起和多
流

たきざうしふまのゆをり。まそがみまよきつよんごたちわくる
初句ハハ抄群。まそこのむと拖詞。まをと伎とるこし

右一首大伴宿禰家持作

追和太宰之時梅花新歌六首

と本他のをと脱せり。元唐南よりて補
まを五日天平二年仲マの家まで

氣勢ノ誤

の梅花う三十三そ再席者、それと十二年よむりて、お持マの述初セ
らり也

民布由都藝芳流波吉多禮登烏梅能芳奈君爾之安良禰
婆遠流人毛奈之

みあゆつきもるきくねだうめのをまきとみふーあらねもさるひよふー

聲ハ清言より用よ、まはまを五の大武能マのむつよくらまのまこてば
かくしこさうめをくマつたのまをくめくいつよむと

烏梅乃花美夜萬等之美雨安里登母也如此乃未君波見
禮登安可爾氣牟

うめのをまきまきとみふあうごうやかくのこまきま、それとあのおせん
こしとのとこしひのやういよをてつめていよほご、まに繁まきとあふせん
ハあるゆせんのことあると、不知とまらふりよがぬ、おまし例え

氣官本勢ふ他梅ハ山の木のまげきややくもく、千花のあんなゆめや、
いつかくしつとをえんがへ他がしんしん

春雨雨毛延之揚奈疑可烏梅乃花登母爾於久禮奴常乃
物香聞

たまふふそえーやまきのうめのまをいかにあんなゆめのかのこも
可ハ等のほちまぐし、柳ハ梅ハ叶を同くしてたまま毎のちまふのこも
この物の下左本能のまや

宇梅能花伊都波乎良自等伊登波禰登佐吉乃盛波乎思
吉物奈利

うめのたまふつはまぐし、いかにあんなゆめのかのこも
自ハ目のほちまぐし、柳ハ梅ハ叶を同くしてたまま毎のちまふのこも
盛の時はちまぐし、柳ハ梅ハ叶を同くしてたまま毎のちまふのこも

遊内乃多努之吉庭雨梅柳乎理加謝思底婆意毛比奈美
可毛

あそぶうちぬきふちうめやなぎをうかごして、おわひきみのも
とちかごてをばかごしたるふのこも、バとほちまぐし、室ちま内ハ日のほちま
あそぶちのちんしん

御苑布能百木乃宇梅乃落花之安采爾登妣安我里雪等
敷里家牟

みそののちまきのうめのちまはちまのあまよびあまよびきとちんしん
こそのハ太宰の園とりのる本ハ梅のたまきと云

右天平十二年十一月九日大伴宿禰家持作

讚三香原新都歌一首并短詩 三香原新都ハ別久速都美

六ノ久速久速新都宮あり、布當宮くいて、美六ノ宮一つ

山背乃久雨能美夜古波春佐禮播花咲乎宇理秋佐禮婆
やまろのくふのみやこはるさればたふさきもくあきされば
黄葉雨保比於婆勢流泉河乃可美都瀬雨宇知橋和多之
わみぢぞふほひれをせるづみののはのかまつせふうちさし
余登瀬雨波宇知橋和多之安里我欲比都可倍麻都良武
よどせりもくさくわしあつぶよひつらへまつらむ
萬代麻底雨
よろづよまぞふ

おびせるに常よせさるる島川に今の本津川よど激ハ水のよどめる事と云
らさくハ和名抄浮橋宇伎波之神代紀高橋浮橋と天鳥船と造らん又
天安河の打橋と造らん又ゆ浮橋ハこの橋を對すれば水は浸ほく
る橋をさくししは後をのめくうけける橋を只倍そのの橋也

反歌

楯並而伊豆美乃河波乃水緒多要受都可倍麻都良年大
宮所

たなめていづみののそのみをたえまつらまつらんれかこやどこん

こちかくて楯のこもこ水脈をこもみとの絡ざるかくはなをん

右天平十三年二月右馬寮頭境部宿禰老麻呂作也

詠霍公鳥歌二首

多知婆奈波常花雨毛歟保登等藝須周無等来鳴者伎可
奴日奈家牟

たちぢなばとこをぬふのほろぎよむむきまのばさこのぬひるん
とこ一よびてある花よあれりりぎよのこもふよ位とてすか
なるとはむすりちうん

珠雨奴久安布知平宅雨宇惠多良婆夜麻霍公鳥可禮受
許武可聞

たまふぬくあちをいふうあてらばまかろきけのいせくんのし

棟のまくとまむよ費交るそくといや

右四月二日大伴宿禰書持後奈良宅贈兄家持歌二首

と、平秋の字の上和のうらむ日深まきとよいよ

橙橘初咲霍公鳥齧嚙對此時候詎不暢志因作三首短
歌以散鬱結之緒耳 橙はあぐらむるに改む嚙字を於耕切鳥

鳴也い智

安之比奇能山邊雨宇禮婆保登等藝須木際多知久吉奈
可奴日波奈之

あしひきのやまづまをればはよきさこのまたちぐきあめいひき

保登等藝須奈爾乃情曾多知花乃多麻奴久月之来鳴登
餘年流 山邊雨宇禮婆保登等藝須木際多知久吉奈
ほとぎこまたあいのころぞたちぞあのためわつぎよきあめいひる

月一のハゆ輝

保登等藝須安不知能枝爾由吉底居者花波知良年奈珠
登見流麻泥

かきよすあちのえごふゆまてあはちらんあたまごころあて

むららるるまてといたさるるく棟のふとまむよ費交るそくといや

こまあもむままごころいひる

右四月三日内舍人大伴宿禰家持後久邇京報送弟書
持

此の歌の例として

右六首歌者天平十六年四月五日獨居於平城故郷舊
宅大伴宿禰家持作 六首とよより舊宅といふまでサニ字之廣に
よたり、致さばあはれなることよと

酒ヲ海
ニ誤

天平十八年正月白雪多零積地數寸也於時左大臣橘
卿率大納言藤原豐成朝臣及諸王諸臣等參入太上天
皇御在所中宮供奉掃雪於是降詔大臣參議并諸王
者令侍于大殿上諸卿大夫等者令侍于南細殿而則賜
酒肆宴 勅曰汝諸王卿等聊賦此雪各奏其詞
聖武紀と考ふる、豐成、天平九年三月大納言日某、此時いまだ中納言
されば大中の位に供奉掃雪、御前侍侍と考ふる、
こみくうくち、細殿、和名抄廊保曾殿下外屋也、正月の下日と

西院は他、酒を海に誤、之廣を酒とよより、
左大臣橘宿禰應詔歌一首

布流由吉乃之路髮麻泥雨大皇雨都可倍麻都禮婆貴久
母安流香

あさゆきのまろのみまぐれ、おろきさこふつるまつればたよとくもあさの

紀朝臣清人應詔歌一首 倭紀和銅七年後六位上トアノ

て、それよつぎく友位を廢て、勝定五年七月散位授四位下より卒
よみゆ

天下須泥爾於保比底布流雪乃比加里乎見禮婆多敷乃
久母安流香

神護元年十一月薨

巨勢奈底麻呂朝臣

倭紀天平元年三月正六位上より外從五位下

と授けられたりつぎついでに、勝宝元年從二位大納言とあり元暦本底と皇亮

大伴牛養宿禰

倭紀和銅三年從五位下遠江守とありつぎ

友位とて、勝宝元年正三位中納言とあり、同国五月亮之曆本養と飼ふ也

藤原仲麻呂朝臣

倭紀天平六年正月正六位上より從五位下と授

けり友位とて、宝字二年大保二任、勅姓中、惠美の二字を加、名を

押勝とて、同八年逆謀頗泄して、石村五石楯押勝と斬す也

三原王

舍人親王の弟なり、よき名なり

智努王

倭紀養老元年正月從四位下と授けり友位とて、

天平十一年信都卿とあり

船王

舍人親王の弟なり、よき名なり

綱ヲ今
ニ誤

邑知王

倭紀天平十一年正月正五位下と授けり、後文室

真人の姓を賜つぎ友位とて、宝龜十二年十一月前大納言正二位文室真

人邑知薨、邑知ハ三品長親王第七子也、よき名なり

山田王

紀元天皇の子、元暦本山と小乙、小田王ハ倭紀天平六年正月死位

より從五位下と授けり也

林王

倭紀天平十五年從五位下と授けり、ついでに、宝龜

二年從四位上三島王之男、林王ハ姓山邊真人と賜けり也

穗積朝臣老

よき名なり

小田朝臣諸人

小の下治と服せり、倭紀天平九年外從五位下小治

田朝臣諸人と散位頭とあり、ついでに、ついでに、ついでに、ついでに、

小野朝臣綱手

倭紀天平十二年正六位上小野朝臣綱手ハ外從五位

下と授けり也、よき名なり

高橋朝臣國足

倭紀天平十五年正六位上より外後五位下時に元

太朝臣德太理

倭紀天平十七年正六位上太朝臣德足より外後五位

高丘連河内

上より元より

秦忌寸朝元

倭紀養老三年秦朝元忌寸の姓を賜同五年後六

位位より元より友位と云々天平七年外後五位上十八年主計頭と云々
懐風藻云辨正法師者俗姓秦氏中略大宝年遣学唐国時遇李隆基

詔潜之日以善園基屢見賞遇有子朝慶朝元法師及慶在唐死元帰
本朝仕至大夫

榑原造東人

倭紀天平十七年正六位上より外後五位下を授と云々

後駿河国守より都内廬屋多故浦濱に黄金を獲て献し云々

東人等勤臣の姓を賜と云々

右件王卿等應詔作歌依次奏之登時不記其歌漏失但秦

忌寸朝元者左大臣橋御諺曰靡堪賦歌以麝贖之因此

默止也朝元ハ唐より生れし者懐風藻に云々云々云々

のひめおせといふ所云々一麝ハ麝香云々朝元者の下敷語云々

大伴宿禰家持以天平十八年閏七月被任越中國守即

取七月赴任所於時姑大伴坂上郎女贈家持歌二首

倭紀天平十八年六月壬寅家持と越中守と云々云々

久佐麻久良多妣由久吉美乎佐伎久安禮等伊波比倍須

惠都安我登許能弊爾

くままくらたひぬくきみとせきくあれいふべをたつあつとめへみ

きさいしひと等故故亦須惠豆と十あれ床のたぐへ振ちる迄の夜と
奇つるすかひくまゆ秋夜のでいつるはたも振ちる人の妻或は親
きんもなごおもるすもくかくいつるの

伊麻能其等古非之久伎美我於毛保要婆伊可爾加母世
牟須流須邊乃奈左

いまのごとひくきみおあはるばいのふのしせんするまぐのなせ

君がハ、原ヨ君とといふこと今今くさるごくならぶおれてはいつお
せんといふもはせんをさお同い

更贈越中國歌二首

多妣爾伊仁思吉義志毛都藝底伊米爾美由安我加多孤
悲乃思氣家禮婆可聞
たひふいうきみもつぎていめふみゆあがくこひのまげくれいのも

君ハお年々おとをすのまけきをよ、おしいおのさよりさうのとん

美知乃奈加久爾都美可未波多妣由伎母之思良奴伎美
牟米貝美多麻波奈

みちのたのくおつみのまたひゆもきくらゆきみとめぐもたまはあ

こちらのあハ越中といふ困つて神ハ越中といふる神もといふトキ
らぬハ者不知今もあれぬといふ同い、君ハあおととさ。

平群氏女郎贈越中守大伴宿禰家持歌十二首

吉美爾餘里吾名波須泥雨多都多山絶多流孤悲乃之氣
吉許呂可母

きみよゆわのまらさでいづるやまたさるゝのまげさいころのも

名ハまといよゆ流田といふトキ、まて舞とつげけるまらさ、平群
郡もまらさ、平群と氏とでさるまらさ、なれは、その山をわていり

小いちりてていざる人よつむやうにりつむひく、
かこつむひんをゆるの男をまきく、
せごのちとつむひんをゆるの男をまきく、
せごのちとつむひんをゆるの男をまきく、

鶯能奈久久良多雨雨宇知波米底夜氣波之奴等母伎美
宇之麻多武

うぐひすのちくくらため、うちめ、
谷とよ、室ぞま大後河、高山之末短山之末
支都速川といふささきささきささきささきささき
のせうて、下垂し川水の山より落るさまを、
あーくいつり、うちをめぐり、ちた日記を、

みして投入るうみやけのきぬよ、大英といひ

麻都能波奈花可受雨之毛和我勢故我於母敬良奈久雨
母登奈佐吉都追

まつのをあまがすよ、わがせごおわくらあくよ、
松のふいふう、花のりごく、まきりのまれば、

白よさきつといふ、色よ出てあること

右件十二首歌者時々寄便使来贈非在一度所送也

八月七日夜集于守大伴宿禰家持館宴歌

秋田乃穗牟伎見我底利和我勢古我布佐多乎里家流乎
美奈敬之香物

あきのたのちむみみて、わがせごのあま、
あきつむひんをゆるの男をまきく、

の多しのながしこの花ふこころしよみくふこいなきころんがほつ
せりといふ池を女はふと持来りしとみおつゆくよまけり
次のちよてきらる

右一首守大伴宿禰家持作

平美奈淑之左伎多流野邊乎由伎采具利吉美乎念出多
母登保里伎奴

たかひりし御細心

安吉能欲波阿加登吉左牟之思路多倍乃妹之衣袖伎牟
餘之母我毛

あきのよあとききこむしきろこのいものころかできんよしむがも
何國をまじく京の姫をせりて

椽ヲ極
誤下回

保登等藝須奈伎底須疑爾之牟加備可良秋風吹奴余之
母安良奈久爾

あきよあとききこむしきろこのいものころかできんよしむがも
何國をまじく京の姫をせりて

右三首椽大伴宿禰池主作

氣佐能安佐氣秋風左牟之登保都比等加里我来鳴牟等
伎知可美香物

遠つ人枕詞

安麻射可流比奈爾月歷奴之可禮登毛由比底之紐乎登
伎毛安氣奈久爾

紐ヲ
誤

拾徳むすたのゝ奴婆多麻乃の下、奈呂能安麻能の上よ決ていふこと
をりしなり

伊毛我伊弊雨伊久理能母里乃、藤花伊麻許年春毛都禰
加久之見年

いもがいのいづかのかりのちのたま、いまんけるもつねかゝるこむ
神名帳越後国蒲原郡伊久礼神社より、礼と里とあるべし、このかりは
ちりん、やん、娘のあひくといふ下し、まは孫子のあひ、此まのたま
まふこんまといつまゝ、かくとやんといふ

右一首傳誦僧玄勝是也

鴈我禰波都可比爾許年等、佐和久良武秋風左無美曾乃
可波能倍爾由山本朝乃、あきこのせとむそ、そのかそのべり
かうねづのいさんとさわぐらんあきこのせとむそ、そのかそのべり

二
五
五

馬並底伊射宇知由可奈思夫多爾能伎欲吉伊蘇末爾與
須流奈彌見爾

うまなめて、いさうちゆりち、まふたふのまよきいそまに、よするなみこふ
うち、いゆりち、いゆりち、いゆりち、いゆりち

右二首守大伴宿禰家持

奴婆多麻乃、欲波布氣奴良之多末久之氣、敷多我美夜麻
爾、月加多夫伎奴

ぬばたまのよいけぬら、たまぐだ、かづがも、やまふじま、いづま、い
二上山の丈和、あれど、その越中、いづまの、むぐだ、枕は

右一首史生土師宿禰道良

大目秦忌寸八千島之館宴歌一首
奈吳能安麻能都里須流布禰波伊麻許曾婆敷奈太那宇
知底安倍底許藝泥采

なごのあまのつりするよわいまこころふふまだなうちてあてこぎでめ

ちご越中へ和名抄祖 不奈 大船旁板也、うらていとつくるをよるん

は原をえそつて、船舟のつづまをらんして結とこ、室をみ今と

ふらふとをかましくうつりて、も言ふ葉のよりくるといふ、程考へ

右館之客屋居望蒼海仍主人八千島作此歌也 え唐か

海と波は他

哀傷長逝之弟歌一首并短歌

安麻射加流比奈宇佐采爾等大王能麻氣乃麻爾末爾出
あまそかろひさをそめふと、おほきみのまけのまにくいで

未ッ未
ニ誤

而許之和禮乎於久流登青丹余之奈良夜麻須疑底泉河
てししわれとおくるとあそふよーあらやまもきそいづみのを
伎欲吉可波良爾馬駐和可禮之時爾好去而安禮可弊里
きよちかからふうまごめわのしーときふよくゆきてあれあへ
許年平久伊波比底待登可多良比底許之比乃伎波美多
こむたひらくいをしてまてとかうひてこーひのきとみた
麻保許能道乎多騰保美山河能弊奈里底安禮婆孤悲之
まがこのみちをたごみやまのはのあつてあれむこひー
家口氣奈我和物能乎見麻久保里念間爾多麻豆左能使
くくけちるまごしのとみまくちやねとあひごたまづまのつひ
乃家禮婆宇禮之美登安我麻知刀敷爾於餘豆禮能多婆
のけれむうれーみとあごまちとよふおよづれのたを

許登等可毛波之伎余思奈第乃美許等奈爾之加母時之
 ことこのもはしきよしあせのみことあふいかしどき
 波安良牟平波太須酒吉穂出秋乃芽子花爾保弊流屋戸
 へあらむとけたまひまらぶるあきあきぎのふふつるやど
 乎言斯人為性好愛花草花樹而多植於寢院之庭故謂之花薰庭也安佐爾波爾伊泥多知
 をあきふたにいでたち
 奈良之暮庭爾敷美多比良氣受佐保能宇知乃里乎往過
 たりゆふふふみたいらげどほのうちのことをゆきまら
 安之比紀乃山能許奴禮爾白雲爾多知多奈妣久等安禮
 あしひきのやまのそぬれふまらうともよたちさびくとあし
 爾都氣都流佐保山火莫故謂之佐保乃宇知乃佐乃由吉須疑
 よつけつる

ひちとあまのハ部治かとう家持て越中の住りたるうとまけ
 ハ任心好ま義をいままきくうむい一日のきりみハ何あまの
 ともまあまの目と取りまらうとてろととどやものたハあはへ
 までハ漏りてえけきいハあまの後の日えき使のれげま
 れのこ又あハあまのほまらうとあまらうとハあまのほまらう
 およづれのたまこらうもま三たよつれうまらうとわがやつる
 今狂誤
 加母まいたまこハあまの奈第ハあまのあまのあまのあまの
 川べし神代紀日神曰吾弟まらうとわがあまのみまらう川和名抄備中下道
 郡分賢川復勢とあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 小まらうまらうけずのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
 文よまらうまらうげまらうとまらうとまらうとまらうとまらうと

しひげずしりあふぞこわれ指へ白きふも火葬の煙といふ
方の候は佐保山いすハ字に本原形ありた本小字ちんをよりとて
信ありふたの氣の信より反身とみづくおんど此書反身の字とち
がる所も多かれはもとのまゝありてなまきこ

麻佐吉久登伊比底之物能乎白雲雨多知多奈妣久登伎
氣婆可奈思物

まきよくとていそのをさうくといふあびくとまげばのあも
白きふ白雲の如小のま火葬の煙とい

可加良牟等可禰底思理世婆古之能宇美乃安里蘇乃奈
美母見世麻之物能乎

からんとかねとちうでこーのうみのあうそのあこよみせまのあ
あうその思理之也五悔一りかきませばつとによりぬちこくこせ

まかのをとりふゆり

右天平十八年秋九月二十五日越中守大伴宿禰家持
遥聞弟喪感傷作之也

相歡歌二首 越中守大伴宿禰家持作 此十字之唐か小なり

庭雨敷流雪波知蔽之久思加乃未雨於母比底伎美乎安
我麻多奈久雨

小いあふゆはちへくくこのこよあわひてまをそあいのまをくあく小
左注まいるぬ池を京より本任はゆとあらまびてまのあまは
ぬくまを思ひてまを結やいもまをまをくかまをいぬかまを
まふハあふけちくハ河をま一つぼてたまをまをくまをくまはた
し水うまをくまをくまを十五まをくまをくまをくまをくまを
まをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを

白浪乃余須流伊蘇末字榜船乃可治登流間奈久於母保
要之伎美

まゝなるこのよきまゝいそまゝとふかねのがらゝるまゝあゝちかえりまゝい

と六右をいん席のこまはるをとりちよきとてとるふんとくせり

右以天平十八年八月掾大伴宿禰池主附大帳使赴向

京師而同年十一月還到本任仍設詩酒之宴彈絲飲樂

是日也白雪忽降積地尺餘此時也復漢夫之船入海浮

瀾爰守大伴宿禰家持寄情二眺聊裁所心 言情二眺ハ

をよとあとの二つのくきまよせくせりまゝとのづゝ

忽沉疴疾殆臨泉路仍作詞以申悲緒一首并短歌

況と本流は後之唐をよとく改疴と枉は後一ちよとく改疴字を贏

也弱也とち

況と本流は後之唐をよとく改疴と枉は後一ちよとく改疴字を贏

大王能麻氣能麻爾麻爾大夫之情布里於許之安思比奇
おろきこのまけのまふくまさらものをとらちあおろあしびき
能山坂古延底安麻射加流比奈爾久太理伎伊伎太爾毛
のやまさゝあこえてあまざのるひあふくだりきいまだおも
伊麻太夜須采受年月毛伊久良母阿良奴爾宇都世美能
いまやちめさうつまもいくらもあらぬふうつせみの
代人奈禮婆宇知奈妣吉等許爾許伊布之伊多家苦之日
よのひとあはばうちあびきここよこいふいたげくのひふ
異益多良知禰乃波波能美許等乃大船乃由久良由久良
けよまざるたらちねのけのみことめねおねのゆくらゆくら
爾思多吳非爾伊都可聞許武等麻多須良武情左夫之苦
ふとていひいひいつこのもむとまたすんごるやうく

よきくえらるゝと願ふ願ふ他ふ一かふより改

波流能波奈伊麻波左加里爾仁保布良牟牟里底加射佐
武多治可良毛我母

たぢのうハチカシ

宇具比須乃奈枳知良須良武春花伊都思香伎美登多牟
里加射左牟

天平二十年二月二十九日大伴宿禰家持 二十年十九年

のほろろと一かふより二十年正月三十一日

○こころ池よりあはれつゝ一かふよりあはれつゝ

忽辱芳音翰苑凌雲兼岳倭詩詞林舒錦以吟以詠能獨

戀緒 侍詩ハ名ありといふ、今猶苑凌雲といひて、兼ていふと、はるばるあま

ち候のや、やうなわ、あし席文のやうな、一、凌雲ハ月るおれが侍よ出て

そふとよあはれつゝのいとも天地と一目と見返りつゝやうなゆといふこと

獨を供ハ、いふこと、のうと、いひ、春可樂暮春風景最可伶紅

桃灼、戲蝶回花儂翠柳依、嬌鶯隱葉歌可樂哉淡文

促席得意忘言樂美美矣幽襟足賞哉 春可樂此春の下脱字とて、

灼ハ毛詩ハ花盛也といへり、儂ハ舞ハは、花子、花解あはれ、依ハ枝の

ちびく、淡交ハよき人の侍らるるんか、ま、る、れ、記、ふ、ゆ、促、席、ハ、

空過令節物色輕入乎所忍有此不能默止俗語云以藤

辱以藤續錦之言更題將石同瓊之詠因是俗愚懷癖不
能默止仍捧數行式酬嗤咲其詞曰遊藝論法ふよるおそよ
ふん横箱之藻ハ文とかくふん彫露ハ漢の揚雄が言ふくそりらふ文を
小人の養ふとくふん山栴ハ麻呂老人の叢林ハ藻林の語の錦は後の
そのふんこふふふふむさくわめとむふまきくふのふんふんふん
ふんふんふんふん

於保吉氏能麻氣乃麻爾麻爾之奈射加流故之乎遠佐采
おほきみのまけのまふくしあやふるこしをくせめ
爾伊泥底許之麻須良和禮須良余能奈可乃都禰之奈家
にいでこしまさらわれさらよのなののつねしあけ
禮婆宇知奈妣伎登許爾已伊布之伊多家苦乃日異麻世
ればらちあびきとこふこいしあけいけくのいふくませ

婆可奈之家口許已爾思出伊良奈家久曾許爾念出奈氣
バかあしけくふねかひでいらあけくふおひいてあけ
久蘇良夜須家奈久爾於母布蘇良久流之伎母能乎安之
くろうやまきへなまてたまほこのみらのとほけハま
比紀能夜麻伎弊奈里底多麻保許乃美知能等保家波間
びきのやまきへなまてたまほこのみらのとほけハま
使毛遣縁毛奈美於母保之吉許等毛可欲波受多麻伎波
づのいしやるよりあふおほほしきことしかよそまたまきそ
流伊能知乎之家登勢牟須辨能多騰吉乎之良爾隱居而念
るいのちをしけとせんすべのたごきをまらにこりあておひ
奈氣加比奈具佐牟流許已呂波奈之爾春花乃佐家流左
なげらひあぐせむるくろハなしふえるむちのさなるそ

宇ヲ年
ニ波ヲ
誤

孤ヲ孤
ニ誤

加里爾於毛敷度知多乎里加射佐受波流乃野能之氣美
かりふおもしろとちたをわかざりずたるのけりいげま
登妣久久鶯音太爾伎加受乎登賣良我春菜都麻須等久
とびくうぐいすのこちぶふまきのぶとめらぶわのあつますとく
禮奈為能赤裳乃須蘇能波流佐采爾爾保比比豆知底加
れるものあのものゆそのたるさめふにかひむづちての
欲敷浪年時盛年伊多豆良爾須具之夜里都禮思努波勢
よふらんとまのせこみをいづらふちぐーやまつれまぬをせ
流君之心乎宇流波之美此夜須我浪爾伊母禰受爾今日
るきみのこころをうするここのよとづらふいしねぞよけよ
毛之賣良爾孤悲都追曾乎流
もしめらふこひつぞをる

万解十七上 三十二

まなきころも枕詞、まなきころもいへ丈夫我之うちまひまひや白とのまの
みりあゆむけりこころハ古事記に徳傳水音伊羅那鶏區そこふ
おひいでうまうくこまおひいでこころとれア、契け云大おはは
我さまのいしうまうとをわひさうふまうまうて、まは打
けりまうみげふくり、和名抄音何和名伊良小草生刺也これまう
ハ無音のまう、又おの後はおとるこころ、胸のいしうとつらまう
源氏物語、いしれんるどあるまう、こふおひびが、まはひがハ、
こころまうまう、まうまう、まうまう、まうまう、まうまう、まうまう、
久のまう、まうまう、まうまう、まうまう、まうまう、まうまう、
まのまう、まうまう、まうまう、まうまう、まうまう、まうまう、
まはまう、まうまう、まうまう、まうまう、まうまう、まうまう、
まのまう、まうまう、まうまう、まうまう、まうまう、まうまう、

